大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

第一章. 万葉に歌われた南大阪

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 右富実 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/10395

第一章　万葉に歌われた南大阪

（一）はじめに～万葉集について～

『万葉集』は、おおよそ飛鳥時代から奈良時代の歌々が載っている、現存する日本最古の歌集である。全二十巻に約四五〇〇首が収められており、代表的な歌人として、額田王（生没年未詳、七〇〇年までは生きていなかったであろう）、柿本人麻呂（生没年未詳、七一〇年までは生きていなかったであろう）、山上憶良（六六〇?～七三三?）、高橋虫麻呂（生没年未詳、制作年次の判明している歌に天平年間のものがある）、大伴旅人（六六五～七三一）、大伴家持（七一八?～七八五）といった人々を挙げることができる。また、万葉集は、後の勅撰集などとは違い、特定の人間が特定の目的を持って一度に編纂した歌集ではない。従って、特定の編者を挙げることができない。おそらくは、持統天皇（六四五～七〇三、在位六八六～六九七）の勅撰集として企図された歌集が、最終的には大伴家持の手によってまとめられたものだろう。

その成立は奈良時代中期（七六〇～七八〇頃?）と思われるが、これはひらがなやカタカナが発明される以前である。すなわち、万葉集歌の原文はすべて漢字で記されているのである。中国語向けに開発された文字を使用して和歌が記されているのである。たとえば、慶雲三年（七〇六）の難波宮行幸時に詠まれた著名な歌、

葦辺行く　鴨の羽がひに　霜降りて　寒き夕べは　大和し思ほゆ（1・六四）

の原文は、

葦邊行鴨之羽我比尓霜零而寒暮夕倭之所念

である。つまり、万葉和歌を読むことは、この漢字ばかりの文字列を歌に変換する作業を経て初めて可能になるの

である。万葉集を読むことは漢字との戦いといっても過言ではない。本来、この「漢字を歌に変換する」という作業は、万葉集を論じる上で不可欠のものであるが、本書は入門書ということもあり、できるだけ漢字仮名交じりに書き下した歌を使用する。ただし、原文が必要な場合もあり、また、原文を見ながら歌を読むことにも慣れる必要もあると考え、原文を記している箇所もある。奈良時代の文学に触れるためにも、是非原文にも目を通してみて欲しい。

そしてまた、奈良時代の文献で万葉集ほど大量の歌が載っているものは他にはない。事実上、万葉集を読むことが奈良時代以前の歌を読むことになってしまう。それはまた、日本における韻文の夜明けを読むことにもなる。というのも、万葉の時代は歌を文字で記すようになった時代でもあり、日本人が自国語を文字化した最初期にも当たるからである。

さて、こうした万葉集であるが、その大きな特徴の一つに地名の詠み込まれている歌、土地を歌った歌の多いことを挙げることができる。犬養孝氏『万葉の旅（上・中・下）』（初版一九六四年、改訂新版が平凡社より二〇〇四年に刊行されている）の計算によると、述べ二七五二ヶ所の地名が登場する。単純計算すれば、万葉集の歌の六割が何らかの形でその土地に関わりを持っていることになる。実際には、地名が登場せずとも、その土地のことを歌っている歌もあるからこの比率はさらに高くなる。『万葉集』は地域の歌集といっても過言ではない。

こういう事情もあってか、万葉集研究はそれぞれの地域に根ざした形で進んできた面が大きい。現在でも、明日香村や平城京址などで発掘が続けられ、その現地説明会に参加すると、何人もの万葉研究者と出会う。この傾向は、実際に研究に携わるものに限らない。たとえば、旅行会社が企画する多くの「万葉旅行」を見ても、各地に残る多くの万葉歌碑（実に二〇〇〇基を越える）に思いをいたしても、万葉和歌と風土との深い繋がりは容易に理解できよう。

本書では、こうした傾向に基づき、万葉集に歌われた南大阪についての論を進めてゆく。

（二）南大阪の万葉歌

「南大阪」をどう定義するかによっても、南大阪の万葉故地の数は変動するが、本書では、おおよそ、現在の住吉大社以南の大阪府内と考えることとする。この基準で南大阪の万葉故地を数えてみると、九十例以上の南大阪に関わる歌々が存在することになる。

南大阪にあって歌に詠まれる地名の中で、圧倒的に多数を占めるのは住吉付近である。南大阪地域の約七十六パーセントにあたる。これは難波宮行幸に際して、住吉方面へ車駕（きょが）を進めることがあり、そこでの詠作が多いためである。本書の第二章第一節はこの住吉を集中して取り上げている。

次に多いのは、茅渟付近（現在の堺市～高石市～泉大津市～忠岡町付近の海岸）である。神戸の対岸にあたるこの地からは、青空の広がる日であれば、十分に六甲の山々を見はるかすことが可能である。堺市を中心とした歌々については本書の第二章第三節で取り上げる。

一方、一組の長短歌ではあるものの、南大阪の万葉歌を代表する作品に高橋虫麻呂歌集所出の「河内大橋」を詠んだ歌がある。これは第二章第二節で取り上げることにする。

最後に第三章では、実際に南大阪の万葉故地を歩くことを念頭に置いて、ほぼ一日行程で巡ることができるよう、行程に沿って個別の歌々を解説した。実地踏査の際の参考になれば幸いである。

なお、それぞれの節で個別の歌々を記すが、南大阪関係万葉歌一覧を載せておく。中には、本当に南大阪の地名であるかどうか論の分かれるものもあり、多めに採録していることをお断りしておく。

（三）南大阪関係万葉歌一覧　付・南大阪万葉地図

・住吉付近の地名は、「大伴の三津」と傍線を記す。
・河内国の地名は、「河内」と二重傍線記す。
・和泉国の地名は、「血沼」と波傍線記す。
・地名は歌われないが、関係の深い歌は「2・八八」と歌番号に傍線を記す。

山上臣憶良、大唐に在る時に、本郷を憶ひて作る歌
いざ子ども　早く日本へ　大伴の　三津の浜松　待ち恋ひぬらむ（1・六三）

慶雲三年丙午、難波宮に幸す時に
志貴皇子の作らす歌
葦辺行く　鴨の羽がひに　霜降りて　寒き夕は　大和し思ほゆ（1・六四）
長皇子の御歌
あられ打つ　安良礼松原　住吉の　弟日娘子と　見れど飽かぬかも（1・六五）

太上天皇、難波宮に幸す時の歌
大伴の　高師の浜の　松が根を　枕き寝れど　家し偲はゆ（1・六六）
右の一首、置始東人
旅にして　物戀之鳴毛　聞こえざりせば　恋ひて死なまし（1・六七）

右の一首、高安大島

大伴の　三津の浜なる　忘れ貝　家なる妹を　忘れて思へや（1・六八）

右の一首、身人部王

草枕　旅行く君と　知らませば　岸の黄生に　にほはさましを（1・六九）

右の一首、清江の娘子、長皇子に進りしなり。姓氏未だ詳らかならず。

磐姫皇后、天皇を思ひて作らす歌四首

君が行き　日長くなりぬ　山尋ね　迎へか行かむ　待ちにか待たむ（2・八五）

右の一首の歌は、山上憶良臣の類聚歌林に載せたり。

かくばかり　恋ひつつあらずは　高山の　岩根しまきて　死なましものを（2・八六）

ありつつも　君をば待たむ　うちなびく　我が黒髪に　霜の置くまでに（2・八七）

秋の田の　穂の上に霧らふ　朝霞　いつへの方に　我が恋止まむ（2・八八）

弓削皇子、紀皇女を思ふ御歌四首（他三首略）

夕さらば　潮満ち来なむ　住吉の　浅香の浦に　玉藻刈りてな（2・一一一）

柿本朝臣人麻呂が羈旅の歌八首（他七首略）

三津の崎　波を恐み　隠り江の　舟公宣奴嶋尓（3・二四九）

高市連黒人が羈旅の歌八首（他七首略）

四極山　うち越え見れば　笠縫の　島漕ぎ隠る　棚なし小舟（3・二七二）

高市連黒人が歌一首

住吉の　得名津に立ちて　見渡せば　武庫の泊まりゆ　出づる舟人（3・二八三）

角麻呂が歌四首（他二首略）

潮干の　三津の海女の　くぐつ持ち　玉藻刈るらむ　いざ行きて見む（3・二九三）

住吉の　野木の松原　遠つ神　我が大君の　行幸所（3・二九五）

余明軍の歌一首

標結ひて　我が定めてし　住吉の　浜の小松は　後も我が松（3・三九四）

上宮聖徳皇子、竹原井に出遊でます時に、龍田山の死人を見て悲傷して作らす御歌一首　小墾田宮に天下治めたまひし天皇の代。小墾田宮に天下治めたまひしは豊御食炊屋姫天皇なり。諱は額田、謚は推古

家にあらば　妹が手まかむ　草枕　旅に臥やせる　この旅人あはれ（3・四一五）

丹比真人笠麻呂、筑紫国に下る時に、作る歌一首　并せて短歌

臣の女の　くしげに乗れる　鏡なす　三津の浜辺に　さにつらふ　紐解き放けず　我妹子に　恋ひつつ居れば　明け暗の　朝霧隠り　鳴く鶴の　音のみし泣かゆ　我が恋ふる　千重の一重も　慰もる　心もありやと　家のあたり

我が立ち見れば　青旗の　葛城山に　たなびける　白雲隠る　天さがる　鄙の国辺に　直向かふ　淡路を過ぎ　粟島を　そがひに見つつ　朝なぎに　水手の声呼び　夕なぎに　梶の音しつつ　波の上を　い行きさぐくみ　岩の間を　い行きもとほり　稲日つま　浦回を過ぎて　鳥じもの　なづさひ行けば　家の島　荒磯の上に　うちなびき　しじに生ひたる　なのりそが　などかも妹に　告らず来にけむ（4・五〇九）

反歌

白たへの　袖解き交へて　帰り来む　月日を数みて　行きて来ましを（4・五一〇）

賀茂女王の歌一首

大伴の　見つとは言はじ　あかねさし　照れる月夜に　直に逢へりとも（4・五六五）

八代女王、天皇に献る歌一首

君により　言の繁きを　故郷の　明日香の川に　みそぎしに行く　一の尾に云ふ「龍田越え　三津の浜辺に　みそぎしに行く」（4・六二六）

河内百枝娘子、大伴宿祢家持に贈る歌二首

はつはつに　人を相見て　いかにあらむ　いづれの日にか　またよそに見む（4・七〇一）

ぬばたまの　その夜の月夜　今日までに　我は忘れず　間なくし思へば（4・七〇二）

好去好来の歌一首　反歌二首（注他略）

神代より　言ひ伝て来らく　そらみつ　大和の国は　皇神の　厳しき国　言霊の　幸はふ国と　語り継ぎ　言ひ継

がひけり　今の世の　人もことごと　目の前に　見たり知りたり　人さはに　満ちてはあれども　高光る　日の大朝廷　神ながら　愛での盛りに　天の下　奏したまひし　家の子と　選ひたまひて　勅旨　頂き持ちて　唐の　遠き境に　遣はされ　罷りいませ　海原の　辺にも沖にも　神留まり　うしはきいます　諸々の　大御神たち　船の舳に　導きまをし　天地の　大御神たち　大和の　大国御魂　ひさかたの　天のみ空ゆ　天翔り　見渡したまひ事終はり　帰らむ日には　また更に　大御神たち　船の舳に　み手うち掛けて　墨縄を　延へたるごとく　あぢかをし　値嘉の崎より　大伴の　三津の浜辺に　直泊てに　み船は泊てむ　障みなく　幸くいまして　はや帰りませ（5・八九四）

反歌

大伴の　三津の松原　かき掃きて　我立ち待たむ　はや帰りませ（5・八九五）

難波津に　み船泊てぬと　聞こえ来ば　紐解き放けて　立ち走りせむ（5・八九六）

車持朝臣千年が作る歌一首　并せて短歌

いさなとり　浜辺を清み　うちなびき　生ふる玉藻に　朝なぎに　千重波寄せ　夕なぎに　五百重波寄す　辺つ波の　いやしくしくに　月に異に　日に日に見とも　今のみに　飽き足らめやも　白波の　い咲き巡れる　住吉の浜

（6・九三一）

反歌一首

白波の　千重に来寄する　住吉の　岸の黄生に　にほひて行かな（6・九三二）

春三月、難波宮に幸す時の歌六首（一部）

住吉の　粉浜のしじみ　開けも見ず　隠りてのみや　恋ひ渡りなむ（6・九九七）

右の一首は作者未だ詳らかならず。

千沼回より　雨そ降り来る　四極の海人　網手綱干せり　濡れもあへむかも（6・九九九）

右の一首、住吉の浜を遊覧し、宮に還る時に、道の上にして、守部王、詔に応へて作る歌

馬の歩み　押さへ留めよ　住吉の　岸の黄生に　にほひて行かむ（6・一〇〇二）

右の一首、安倍朝臣豊継の作

石上乙麻呂卿、土左国に配さるる時の歌三首　并せて短歌（関係歌抄出）

大君の　命恐み　さし並ぶ　国に出でます　はしきやし　我が背の君を　かけまくも　ゆゆし恐し　住吉の　現人神　船の舳に　うしはきたまひ　着きたまはむ　島の崎々　寄りたまはむ　磯の崎々　荒き波　風にあはせず　障みなく　病あらせず　早けく　帰したまはね　本の国辺に（6・一〇二〇、一〇二一）

反歌一首

大崎の　神の小浜は　小さけど　百舟人も　過ぐといはなくに（6・一〇二三）

月を詠む（関係歌抄出）

靫掛くる　伴の緒広き　大伴に　国栄えむと　月は照るらし（7・一〇八六）

摂津にして作る（関係歌抄出）

悔しくも　満ちぬる潮か　住吉の　岸の浦回ゆ　行かましものを（7・一一四四）

妹がため　貝を拾ふと　千沼の海に　濡れにし袖は　干せど乾かず（7・一一四五）

めづらしき　人を我家に　住吉の　岸の黄生を　見むよしもがも（7・一一四六）

暇あらば　拾ひに行かむ　住吉の　岸に寄るといふ　恋忘れ貝（7・一一四七）
馬並めて　今日我が見つる　住吉の　岸の黄生を　万代に見む（7・一一四八）
住吉に　行くといふ道に　昨日見し　恋忘れ貝　言にしありけり（7・一一四九）
住吉の　岸に家もが　沖に辺に　寄する白波　見つつしのはむ（7・一一五〇）
大伴の　三津の浜辺を　うち曝し　寄せ来る波の　行くへ知らずも（7・一一五一）
梶の音そ　ほのかにすなる　海人娘子　沖つ藻刈りに　舟出すらしも　一に云ふ「夕されば　梶の音すなり」（7・一一五二）
住吉の　名児の浜辺に　馬立てて　玉拾ひしく　常忘らえず（7・一一五三）
雨は降る　仮廬は造る　いつの間に　吾児の潮干に　玉は拾はむ（7・一一五四）
名児の海の　朝明のなごり　今日もかも　磯の浦回に　乱れてあるらむ（7・一一五五）
住吉の　遠里小野の　ま榛もち　摺れる衣の　盛り過ぎ行く（7・一一五六）
時つ風　吹かまく知らず　吾児の海の　朝明の潮に　玉藻刈りてな（7・一一五七）
住吉の　沖つ白波　風吹けば　来寄する浜を　見れば清しも（7・一一五八）
住吉の　岸の松が根　うち曝し　寄せ来る波の　音のさやけさ（7・一一五九）

羈旅にして作る（関係歌抄出）

朝なぎに　ま梶漕ぎ出でて　見つつ来し　三津の松原　波越しに見ゆ（7・一一八五）
舟泊てて　かし振り立てて　廬りせむ　名子江の浜辺　過ぎかてぬかも（7・一一九〇）

旋頭歌（関係歌抄出）

住吉の　波豆麻の君が　馬乗り衣　さひづらふ　漢女を据ゑて　縫へる衣ぞ（7・一二七三）

住吉の　出見の浜の　柴な刈りそね　娘子らが　赤裳の裾の　濡れて行かむ見む（7・一二七四）
住吉の　小田を刈らす児　奴かもなき　奴あれど　妹がみためと　私田刈る（7・一二七五）

糸に寄する

河内女が　手染めの糸を　繰り返し　片糸にありとも　絶えむと思へや（7・一三一六）

花に寄する（関係歌抄出）

住吉の　浅沢小野の　かきつはた　衣に摺り付け　着む日知らずも（7・一三六一）

羈旅の歌

名児の海を　朝漕ぎ来れば　海中に　鹿子そ鳴くなる　あはれその鹿子（7・一四一七）

天平五年癸酉の春閏三月、笠朝臣金村、入唐使に贈る歌一首　并せて短歌（反歌略）

玉だすき　かけぬ時なく　息の緒に　我が思ふ君は　うつせみの　世の人なれば　大君の　命恐み　夕されば　鶴がつま呼ぶ　難波潟　三津の崎より　大舟に　ま梶しじ貫き　白波の　高き荒海を　島伝ひ　い別れ行かば　留まれる　我は幣引き　斎ひつつ　君をば遣らむ　はや帰りませ（8・一四五三）

水江の浦島子を詠む一首　并せて短歌（長歌一部）

春の日の　霞める時に　住吉の　岸に出で居て　釣舟の　とをらふ見れば　古の　事そ思ほゆる～（9・一七四〇）

河内の大橋を独り行く娘子を見る歌一首　并せて短歌

しなてる　片足羽川の　さ丹塗りの　大橋の上ゆ　紅の　赤裳裾引き　山藍もち　摺れる衣着て　ただひとり　い渡らす児は　若草の　夫かあるらむ　檀の実の　ひとりか寝らむ　問はまくの　欲しき我妹が　家の知らなく（9・一七四二）

反歌

大橋の　頭に家あらば　心悲久　ひとり行く児に　宿貸さましを（9・一七四三）

葦屋の処女の墓に過る時に作る歌一首　并せて短歌

古の　ますら男の　相競ひ　妻問ひしけむ　葦屋の　菟原処女の　奥つ城を　我が立ち見れば　永き世の　語りにしつつ　後人の　偲ひにせむと　玉桙の　道の辺近く　岩構へ　作れる塚を　天雲の　そきへの極み　この道を行く人ごとに　行き寄りて　い立ち嘆かひ　或る人は　音にも泣きつつ　語り継ぎ　偲ひ継ぎ来る　処女らが　奥つ城所　我さへに　見れば悲しも　古思へば（9・一八〇一）

反歌

古の　小竹田壮士の　妻問ひし　菟原処女の　奥つ城ぞこれ（9・一八〇二）

語り継ぐ　からにもここだ　恋しきを　直目に見けむ　古壮士（9・一八〇三）

菟原処女が墓を見る歌一首　并せて短歌

葦屋の　菟原処女の　八歳子の　片生ひの時ゆ　小放りに　髪たくまでに　並び居る　家にも見えず　虚木綿の隠りて居れば　見てしかと　いぶせむ時の　垣ほなす　人の問ふ時　千沼壮士　菟原壮士の　廬屋焼き　すすし競ひ　相結婚ひ　しける時には　焼き大刀の　手かみ押しねり　白真弓　靫取り負ひて　水に入り　火にも入らむと

立ち向かひ　競ひし時に　我妹子が　母に語らく　倭文たまき　賤しき我が故　ますらをの　争ふ見れば　生けりとも　逢ふべくあれや　ししくしろ　黄泉に待たむと　隠り沼の　下延へ置きて　うち嘆き　妹が去ぬれば　千沼壮士　その夜夢に見　取り続き　追ひ行きければ　後れたる　菟原壮士い　天仰ぎ　叫びおらび　地を踏み　きかみたけびて　もころ男に　負けてはあらじと　掛け佩きの　小大刀取り佩き　ところづら　尋め行きければ　親族どち　い行き集ひ　永き代に　標にせむと　遠き代に　語り継がむと　処女墓　中に造り置き　壮士墓　このもかのもに　造り置ける　故縁聞きて　知らねども　新喪のごとも　音泣きつるかも（9・一八〇九）

反歌

葦屋の　菟原処女の　奥つ城を　行き来と見れば　音のみし泣かゆ（9・一八一〇）

墓の上の　木の枝なびけり　聞きしごと　千沼壮士にし　依りにけらしも（9・一八一一）

逢ふを懽ぶる

住吉の　里行きしかば　春花の　いやめづらしき　君に逢へるかも（10・一八八六）

鳥を詠む

妹が手を　取石の池の　波の間ゆ　鳥が音異に鳴く　秋過ぎぬらし（10・二一六六）

飛鳥川

もみち葉流る　葛城の　山の木の葉は　今し散るらし（10・二二一〇）

千沼の海の　浜辺の小松　根深めて　我恋ひ渡る　人の児故に　或本の歌に曰く「千沼の海の　潮干の小松　ねもころに　恋ひや渡らむ　人の児故に」（11・二四八六）

水田に寄する

住吉の　崖を田に墾り　蒔きし稲　かくて刈るまで　逢はぬ君かも（10・二二四四）

住吉の　津守網引の　浮けの緒の　浮かれか行かむ　恋ひつつあらずは（11・二六四六）

行きて見て　来れば恋しき　浅香潟　山越しに置きて　寝ねかてぬかも（11・二六九八）

白砂　三津の黄土の　色に出でて　言はなくのみそ　我が恋ふらくは（11・二七二五）

住吉の　岸の浦回に　しく波の　しくしく妹を　見むよしもがも（11・二七三五）

大伴の　三津の白波　間なく　我が恋ふらくを　人の知らなく（11・二七三七）

住吉の　浜に寄るといふ　うつせ貝　実なきこともち　我恋ひめやも（11・二七九七）

住吉の　敷津の浦の　なのりその　名は告りてしを　逢はなくも怪し（12・三〇七六）

住吉の　岸に向かへる　淡路島　あはれと君を　言はぬ日はなし（12・三一九七）

時つ風　吹飯の浜に　出で居つつ　贖ふ命は　妹がためこそ（12・三二〇一）

大君の　命恐み　秋津島　大和を過ぎて　大伴の　三津の浜辺ゆ　大舟に　ま梶しじ貫き　朝なぎに　水手の声しつつ　夕なぎに　梶の音しつつ　行きし君　いつ来まさむと　占置きて　斎ひ渡るに　狂言か　人の言ひつる　我が心　筑紫の山の　もみち葉の　散り過ぎにきと　君がただかを（13・三三三三　反歌略）

大伴の　三津に船乗り　漕ぎ出ては　いづれの島に　廬りせむ我（15・三五九三）

右の三首、発ちに臨む時に作る歌（二首略）

物に属きて思ひを発す歌一首　并せて短歌（長歌一部）

朝されば　妹が手に巻く　鏡なす　三津の浜辺に　大舟に　ま梶しじ貫き　韓国に　渡り行かむと～（15・三六一七）

筑紫に回り来、海路にて京に入らむとし、播磨国の家島に到りし時に作る歌五首（関係歌抄出）

ぬばたまの　夜明かしも舟は　漕ぎ行かな　三津の浜松　待ち恋ひぬらむ（15・三七二一）

大伴の　三津の泊まりに　舟泊てて　龍田の山を　いつか越え行かむ（15・三七二二）

（竹取翁の歌　長歌一部）

～紫の　大綾の衣　住吉の　遠里小野の　ま榛もち　にほほす衣に～（16・三七九一）

反歌（抄出）

住吉の　岸野の榛に　にほふれど　にほはぬ我や　にほひて居らむ　八（16・三八〇一）

住吉の　小集楽に出でて　現にも　己妻すらを　鏡と見つも（16・三八〇八）

右、伝へて云はく、昔、鄙人あり、姓名未だ詳らかならず。ここに郷里の男女、衆集ひて野遊す。この会集の中に鄙人の夫婦あり。その婦、容姿端正しきこと、衆諸に秀れたり。すなはちその鄙人の意に、弥妻を愛しぶる情を増す。この歌を作り美貌を讃嘆す、といふ。

処女墓の歌に追同する一首　并せて短歌

古に　ありけるわざの　くすばしき　事と言ひ継ぐ　千沼壮士　菟原壮士の　うつせみの　名を争ふと　たまきはる　命も捨てて　争ひに　妻問ひしける　処女らが　聞けば悲しさ　春花の　にほえ栄えて　秋の葉の　にほひに照れる　あたらしき　身の盛りすら　ますらをの　言いたはしみ　父母に　申し別れて　家離り　海辺に出で立ち朝夕に　満ち来る潮の　八重波に　なびく玉藻の　節の間も　惜しき命を　露霜の　過ぎましにけれ　奥つ城をここと定めて　後の世の　聞き継ぐ人も　いや遠に　偲ひにせよと　黄楊小櫛　然刺しけらし　生ひてなびけり
（19・四二一一）

処女らが　後のしるしと　黄楊小櫛　生ひ変はり生ひて　なびきけらしも（19・四二一二）

民部少輔多治真人土作の歌一首

住吉に　斎く祝が　神言と　行くとも来とも　船は速けむ（19・四二四三）

天平五年、入唐使に贈る歌一首　并せて短歌　作り主未だ詳らかならず

そらみつ　大和の国　あをによし　奈良の都ゆ　おし照る　難波に下り　住吉の　三津に船乗り　直渡り　日の入る国に　遣はさる　我が背の君を　かけまくの　ゆゆし恐き　住吉の　我が大御神　船の舳に　うしはきいまし船艫に　み立たしまして　さし寄らむ　磯の崎々　漕ぎ泊てむ　泊まり泊まりに　荒き風　波にあはせず　平けく

率て帰りませ　もとの朝廷に（19・四二五四）

反歌

沖つ波　辺波な立ちそ　君が船　漕ぎ帰り来て　津に泊つるまで（19・四二五五）

追ひて防人が別れを悲しぶる心を痛みて作る歌一首　并せて短歌（長歌一部、反歌略）

～あらたまの　月日数みつつ　葦が散る　難波の三津に　大舟に　ま櫂しじ貫き～（20・四三三一）

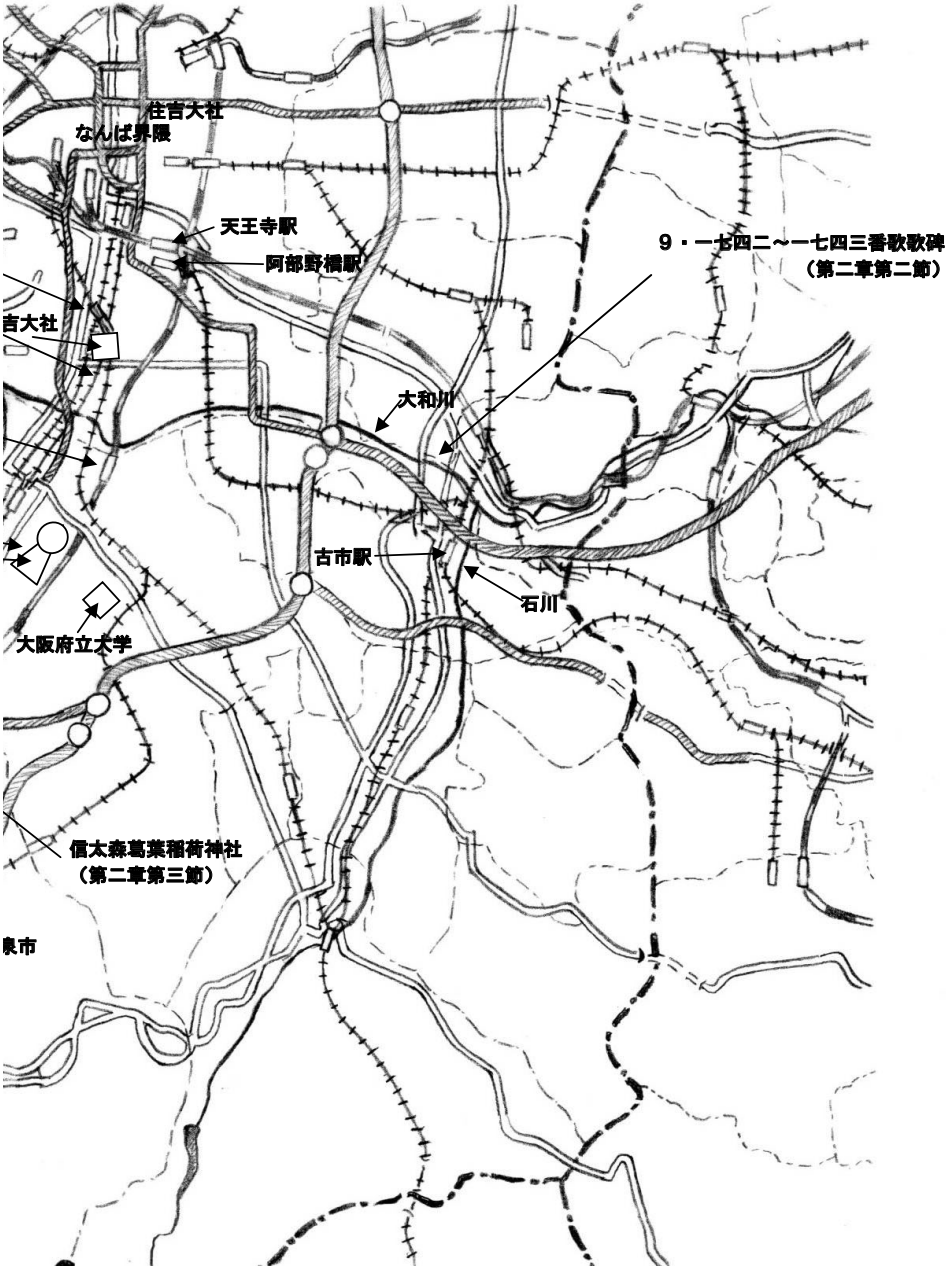
防人が別れを悲しぶるの情を陳ぶる歌一首　并せて短歌（長歌一部、反歌略）

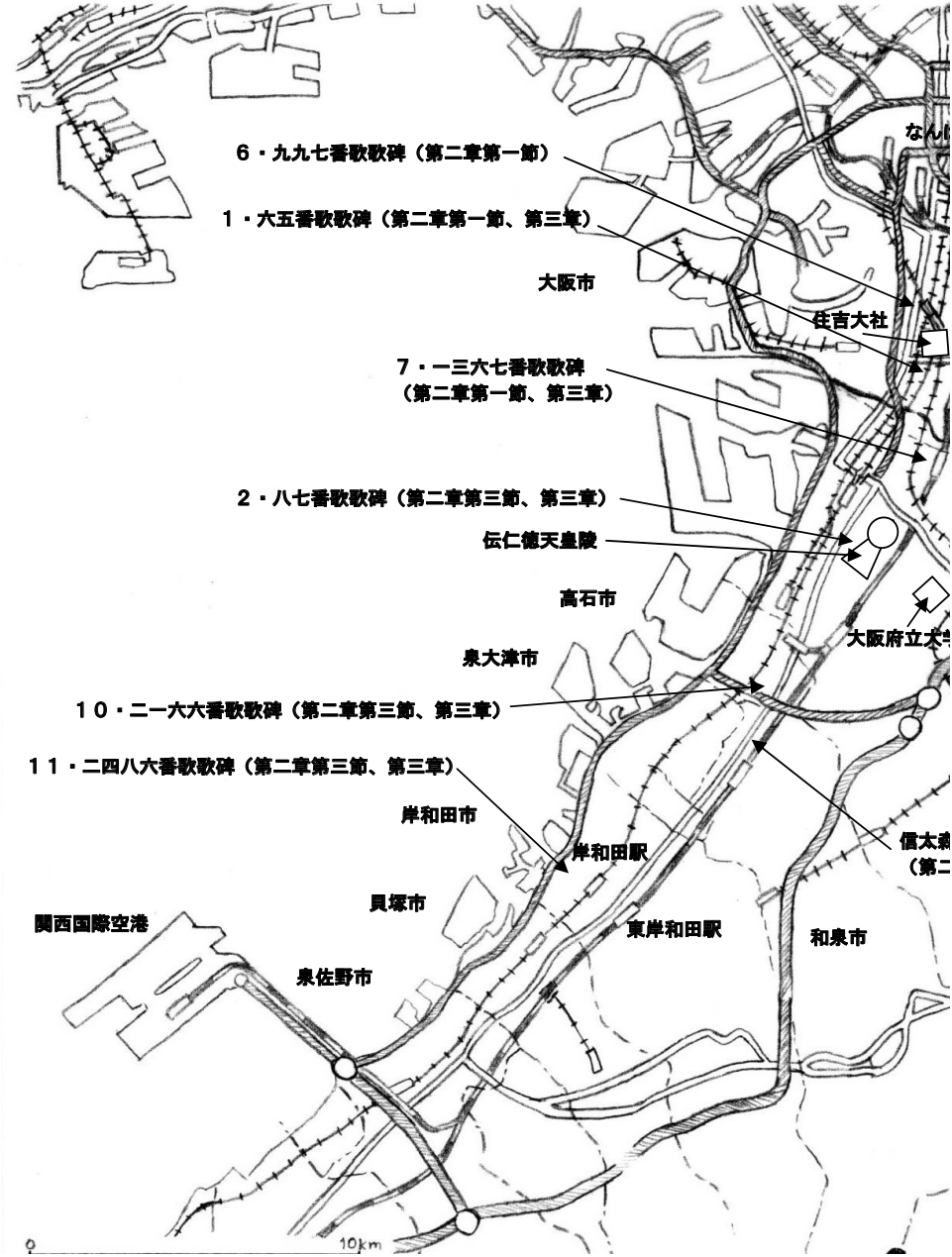
～平けく　親はいまさね　障みなく　妻は待たせと　住吉の　我が皇神に　幣奉り　祈り申して　難波津に　舟を浮け据ゑ　八十梶貫き　水手整へて　朝開き　我は漕ぎ出ぬと　家に告げこそ（20・四四〇八）

天平勝宝八歳丙申の二月、朔乙酉の二十四日戊申に、太上天皇・天皇・大后、河内離宮に幸行して、信を経て壬子を以て難波宮に伝幸したまふ。三月七日、河内国伎人郷の馬国人が家にして宴したまふ歌三首

住吉の　浜松が根の　下延へて　我が見る小野の　草な刈りそね（20・四四五七）

右の一首、兵部少輔大伴宿祢家持


住吉大社
なんば界隈
天王寺駅
阿部野橋駅
吉大社
大和川
古市駅
石川
大阪府立大学
信太森葛葉稲荷神社
（第二章第三節）
泉市
９・一七四二～一七四三番歌歌碑
（第二章第二節）


6・九九七番歌歌碑（第二章第一節）
1・六五番歌歌碑（第二章第一節、第三章）
大阪市
住吉大社
7・一三六七番歌歌碑
（第二章第一節、第三章）
2・八七番歌歌碑（第二章第三節、第三章）
伝仁徳天皇陵
高石市
泉大津市
10・二一六六番歌歌碑（第二章第三節、第三章）
11・二四八六番歌歌碑（第二章第三節、第三章）
岸和田市
岸和田駅
貝塚市
関西国際空港
東岸和田駅
和泉市
泉佐野市
0
10km